

神社跡地の撮影を続けるにあたって

——今後の撮影予定地と中国・韓国・ミクロネシアの神社跡地報告——

稲宮 康人

巻頭カラーページに掲載した神社跡地の写真は『帝国後 海外神社跡地の景観変容』に引き続いて撮影したものである。

私は2008年から、近代以降に大日本帝国の勢力圏内に創られた神社が現在どのようになっているのか、をテーマにして撮影している。当初は近代社格制度の中で最上位を占めていた官国幣社と別格官幣社を対象として、大日本帝国の内地と外地とで存続と消滅という正反対の道を辿った創建神社の戦後の状況を撮影し、東アジアの現在の姿を浮かびあがらせようと考えていた。その成果は、2012年の写真展と、図録の発行という形に結実した。しかしながら当初計画していた撮影を終えてみると、外地に創られた官国幣社の撮影だけでは、大日本帝国と神社というテーマを消化できないことが判った。そこで、海外の神社跡地の撮影対象を広げることに決め、撮影対象を社格とは無関係に大日本帝国の植民地と占領地域から選ぶこととした。

具体的には、旧朝鮮及び旧南洋群島では官国幣社以外の神社跡地を追加で撮影することにした。中国は、関東州・満州・租界・占領都市に創った神社を社格に関係なく撮影対象とし、北は中露国境の町黒河から南は海南島まで大日本帝国の勢力範囲をなぞるように撮ることを考えている。他の地域、特に東南アジア諸国の神社跡地については、なるべく多く撮影しようと考えている。有名なシンガポールの昭南神社以外では、タイ・アユタヤの長政神社、ベトナム・ホーチミンの暁神社、インドネシア・メダンの絃原神社は大凡の位置が判明している。インドネシアのタラカンとクーパンにも神社があったことを確認したが、正確な場所が確定できるかどうかは判らない。東南アジアの占領地域には、以上に挙げた

神社以外にも多数の神社を創ったと推測されるが、今まで調査されたことがなく、戦後から70年近く経った今、情報を新たに掘り起こしていくことは非常に困難である。

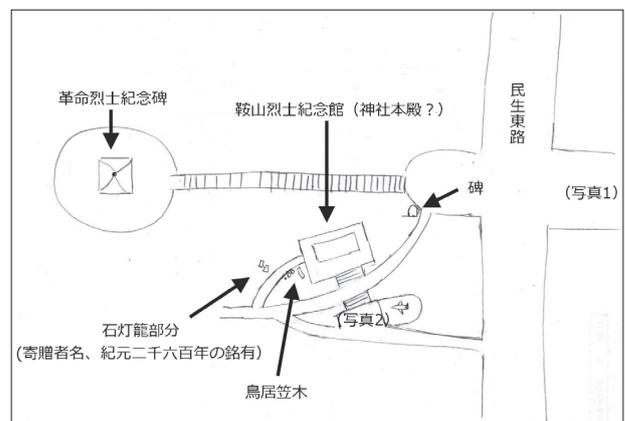
以上のような趣旨で2013年後半から撮影を再開し、中国、ミクロネシア連邦、韓国で撮影を行った。その中から今まで調査が行われていなかった神社跡地について簡単な報告を行いたい。

旧・関東州、満州（現・中国遼寧省）

2013年9月13日から23日まで、大連神社（大連）、関東神宮（旅順）、白玉山納骨祠（旅順）、鞍山神社（鞍山）、奉天神社（瀋陽）、撫順神社（撫順）、安東神社（丹東）を撮影した。その中から鞍山神社、安東神社、関東神宮、白玉山納骨祠、大連神社の概要について以下に記す。

鞍山神社（中華人民共和国遼寧省鞍山市）（地図1）

鞍山神社が建てられていた場所は現在は烈士山公園となっている（写真1）。この公園は国共内戦時に戦場となった為、その歴史を記した石碑（カラーペ



地図1 鞍山神社跡（烈士山公園）



写真1 烈士山公園全景

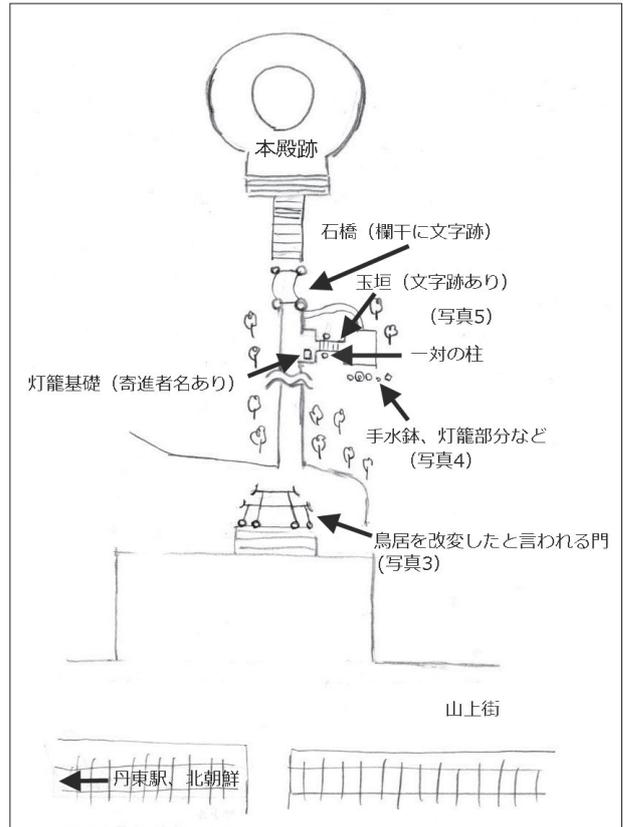


写真2 鞍山烈士紀念館

ージ viii) が公園入口に建てられており、その中には満州国時代に神社があったことも記されている。山の頂上には国共内戦と抗日戦争の義士を記念する巨大な鞍山市革命烈士紀念碑が建っている。そこからは植民地の中で最大規模であった旧・鞍山製鉄所⁽¹⁰⁾も見ることができる。しかし、神社があったのは山頂ではない。神社は山の南麓にあった。本殿跡地は現在の烈士紀念館の場所で、階段は当時のものと思われる(写真2)。入口脇は戦闘機が置かれた広場になっている。紀念館の正面入口を左に曲がり、少し道を登って裏手に回ると、藪の中に紀元二千六百年記念と刻まれた石灯籠の部分、鳥居の笠木(カラーページ iv)、そして神社のものと思われる多くの石が埋もれていた。

安東神社(中華人民共和国遼寧省丹東市)(地図2)

安東神社があった場所は錦江山公園となってい



地図2 安東神社跡(錦江山公園)



写真3 錦江山公園入口の牌坊

る。公園入口の牌坊は安東神社の鳥居を改造したもののようである(写真3)。公園入口からまっすぐ参道を進み、石橋を渡って、階段を登ると本殿跡に着く。石橋の欄干に刻まれていた文字は削られ、その跡はコンクリートで埋められていた。本殿跡は中央に門のような彫刻が置かれた広場になっており(カラーページ xvi)、神社遺構は何も残っていなかった。

参道右手には境内社があり、その遺構はよく残っていた(写真4)⁽¹¹⁾。寄進者の名前が刻まれた石灯籠の基礎、刻まれていた字が削り取られた参道沿いの玉垣、鳥居か注連縄掛であったと思われる柱がある



写真4 境内社社号碑か？



写真5 境内社玉垣と柱

(写真5)。境内社の本殿があったと思われる場所は広場になっていたが、その脇の山の斜面には手水鉢や灯籠の笠だと思われる石材が適当に置いてあった。

関東神宮（中華人民共和国遼寧省大連市）

神宮が建てられた大正公園は海軍施設になっており、一般人の立入は難しい(写真6)。施設へと一直線にのびる道は当時の参道がそのまま使われている(カラーページx)。施設内には当時の建物が一部残っているようである。⁽¹²⁾

白玉山納骨祠（中華人民共和国遼寧省大連市）

海軍基地の街旅順を一望できる白玉山の頂上にある。納骨祠は白玉山塔(旧称・表忠塔)の向かい側に創られていた。今は海軍兵器館となっている。兵



写真6 海軍施設入口



写真7 海軍兵器館入口看板

兵器館の入口には大きな看板が立っており、その中には『日本侵華罪証“白玉神社一納骨祠”』と書かれていた(写真7)。本殿があった場所には戦車やヘリコプター、ミサイルなどの兵器が展示してある(カラーページvi)。私が行った時にはアラブ系の観光客が兵器に乗って記念写真を撮っていた。

大連神社（中華人民共和国遼寧省大連市）(地図3)

旧・大和ホテルや旧・横浜正金銀行が立ち並ぶ中山広場から南に進み、南山にぶつかる辺りに大連神社があった。今は何も残っていないようである。現在解放小学校に向かってゆるやかに曲がりながら進む解放街は、かつては神社に向かってまっすぐ伸びる道だったので、解放街を当時のようにまっすぐ直進させた場所に建つアパート(カラーページxii)か、解放小学校の校庭辺りに本殿があったと推測される。撮影中、アパートの前の家に住む人に「うちには日本時代からの木が生えているぞ、是非撮りな



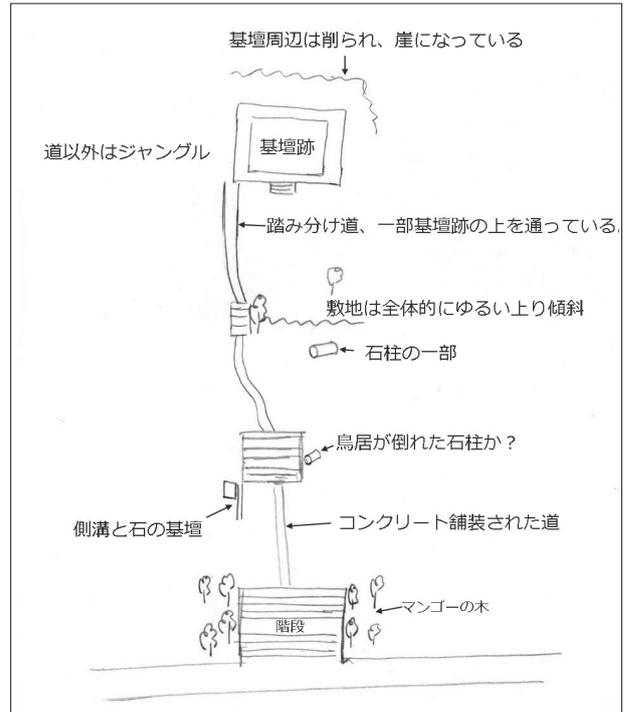
地図3 大連神社跡



写真8 大連神社時代からあるという木

さい」と言われ（中国語が出来ないため推測であるが）、家の中に招かれ撮影させてもらった（写真8）。撮影後、桃をご馳走になった。

奉天神社、撫順神社については既に報告書⁽¹³⁾があるので、そちらを参照して頂きたい。奉天神社は軍が管轄する体育館（カラーページ iii）や劇場になっており、「基本的に」撮影禁止となっている。昨今、対中関係の悪化が繰り返し報道される中で、日本が



地図4 都洛神社跡

創った神社の跡地を撮影するのは反日感情を刺激するか？などに行く前は心配したが、現地で日本人を理由にした嫌がらせを受けたことはほとんど無かった。大連では、私が日本人だというだけで女子高生に囲まれ一緒に写真を撮ることもあった。ここまで極端な反応は珍しいが、大抵の場合は古地図を見せて、身振りや筆談で自分がやっていることを伝えると、好意的な反応が返ってくるのがほとんどであった。何度か訪れた中国では、メディアの中に反日報道を見ることはよくあったが、日本における反中嫌韓とは違って、反日の「空気」が人々の間に広がっているようには感じなかった。

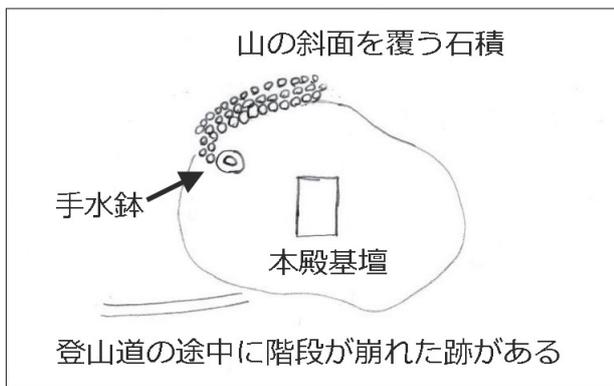
旧・南洋群島トラック諸島

（現・ミクロネシア連邦チューク州）

2013年10月3日から7日まで訪れた。調査の詳細はニューズレター『非文字資料研究』31号に書いたのでそちらを見て頂きたい。ここでは見取図を掲載する。

都洛神社⁽¹⁴⁾

（ミクロネシア連邦チューク州ダブロン島）（地図4）
当時の様子を窺うことができる神社跡地。階段



地図5 春島神社跡

や基壇（カラーページ xvii）がかなり残っている。
1944年2月17日、18日のトラック大空襲⁽¹⁵⁾で破壊されたが、今は跡地全体が熱帯雨林に覆われており、細かい調査は出来なかった。

春島神社

（ミクロネシア連邦チューク州モエン島）（地図5）

資料はなく、現地ガイドのトラック・オーシャン・サービスの末永氏の聞き取り調査によって明らかになった神社。

旧・朝鮮（現・大韓民国）

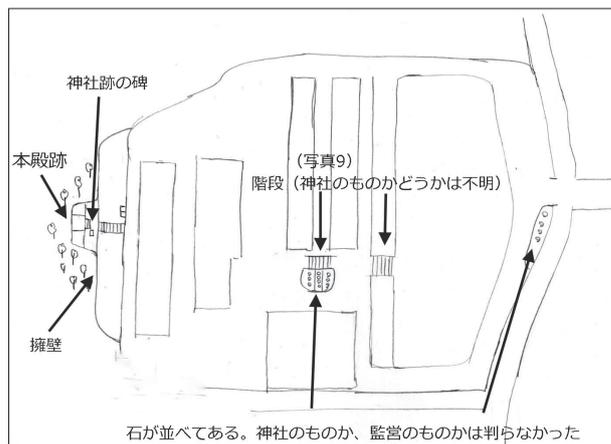
2013年12月17日から24日まで、韓国の仁川神社（仁川）、愛宕神社（仁川）、公州神社（公州）、招魂社（公州）、大田神社（大田）、忠州神社（忠州）に行った。

公州神社（大韓民国忠清南道公州市）（地図6）

市街を一望できる鳳凰山の中腹にあった。今は公州大学師範学部付設中学校、高等学校になっている（写真9）。学校の敷地の一番奥には本殿基壇（カラーページ vii）や石垣が遺されており、神社跡を示す石碑が設置されていた。神社が創られる前は、忠清道の役所である監營が建てられていた。

招魂社（大韓民国忠清南道公州市）

公州神社から市街地を挟んで反対にある丘の上に創られていた（写真10）。今は、李承晩政権を倒した四月革命（1960年）の記念碑（カラーページ xv）が建てられている。



地図6 公州神社跡（公州大学師範学部付設中学校、高等学校）



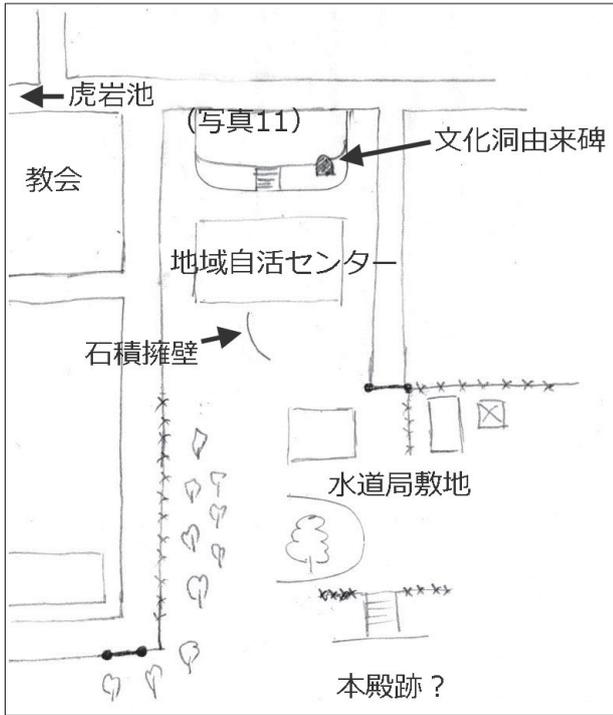
写真9 公州神社階段か？



写真10 写真中央部に見える小さな丘の上に招魂社があった

忠州神社（大韓民国忠清北道忠州市）（地図7）

忠州神社跡地は小高い丘の上にあり、現在は忠州地域自活センター（写真11）や市の水道局の土地となっている。本殿があったと思われる丘の頂上は水道局の敷地で立入禁止になっており、中に入って跡



地図7 忠州神社跡（忠州地域自活センター、水道局など）



写真11 忠州地域自活センター

地を確認することはできなかった。地域自活センターの一角にはこの地域の歴史を書いた碑（カラーページ ix）が建ててあり、「かつては社稷壇があり、その場所に神社や征露記念忠魂碑が創られた」というようなことが書かれていた。

大田、仁川の神社については、『侵略神社跡地調査・巨文島・大田・仁川』（辻子実）の章で詳しく報告しているので、そちらを参照して頂きたい。なお、大田神社の場所については、私は聖母女子高等学校である説を取り、学校の正面玄関に使われている石畳（カラーページ v）が神社の遺構であると推

測し撮影を行った。

以上の神社を含め、今まで六つの国・地域（ロシア、中国、韓国、台湾、パラオ、ミクロネシア）で神社跡地を撮影してきた。実際に豊原（ユジノサハリンスク）から夏島（デュプロン島）まで行き、その広さにうんざりし、これから行く予定の跡地を書きこんだアジアの地図を見て一層うんざりさせられている。それぞれの国の植民地・占領時代がその国の歴史の中でどのように位置付けられているかによって、神社跡地の扱われ方に違いがあるが、痕跡が無くなっていても地元の人々の記憶の中には残っていることが多いように感じている。当時の「日本人」にとって常識だった、新しく住む場所に神社を建てる、という行為は、今では全く過去のものとなってしまった。当時、新しく入植した土地への「郷土愛」や、内地人であった「日本人」の「常識」に拠って神社を創建した人々は、数十年後に何も無くなっているとは考えもしなかつただろう。それは冷戦中に生きていた人々がベルリンの壁が崩壊すると本気で考えることができなかつたことや、2011年3月11日以前の私達が原子力発電所が爆発すると本気で考えることができなかつたことと同じなのだろう。ある時代の「常識」というものが別の時代には全く理解されないということは多々あると思うが、帝国領の隅々に「日本人」が神社を創建したこともその一つとして挙げられるのではないだろうか。

海外神社の研究資料の一つに戦前の絵葉書がある⁽¹⁶⁾。カメラが一般に普及していなかつた時代、写真絵葉書は視覚を使って物事を伝える有力なメディアであった。購入された絵葉書は、葉書として利用されたり、土産物となつたり、収集されたりすることで広く流通し、それと共にイメージも「日本人」の中で共有されていった。今残っている神社の絵葉書の量と種類の多さは、それだけの需要があつたことを反映しており、戦前の社会の中で神社が占めていた位置の重要性を物語っている。また、当時の神社に対する「日本人」の「常識」を映し出したものともいえる。私の写真は、日本人が今も神社に対して抱いている当時と現在とであまり変わっていない

い「伝統」的な神社の（絵葉書的ともいえる）イメージを利用して近代の創建神社と神社跡地を美しく撮影したものである。これは「伝統」的な神社を海外に創られた神社の跡地と共に提示することで、古代から連綿と続く「伝統」的な存在としての神社という「常識」を再検討し、「伝統」から都合よく忘却された近現代史の頁を取り戻すことを意図している。日本に在り続けている創建神社と、多くの国々の神社跡地を写真で結ぶことで、戦前と戦後の連続と断絶という時間軸が浮かび上がってくる。また、

日本と海外という対照関係だけでなく、海外の国々を対照させることによって、戦後世界の多様性という別の軸も導き出されてくる。この二つの軸を使うことで、大日本帝国崩壊後の複雑な歴史を無理に単純化することなく、複雑なまま提示できると考えている。また、近年単なる無知によった乱暴な植民地近代化論を振りかざす輩が跋扈し始めているが、神社跡地を丁寧に辿ることは、そうした乱暴な論に対する一つの反証になる、とも考えている。

[注]

- (1) 非文字資料の中には写真という大きな分野があるが、写真を撮る者として、写真というメディアについて記してみたい。

写真はレンズの前にあった現実の忠実な複写と見做されることが多いが、現実そのものではなく、撮影者が現実を注意深く取捨選択した映像＝「写真」である。写真撮影は、被写体が持つ意味を発見したり、感動を覚えたりすることによって始まる行為である。とすれば、そこには撮影者が意味を発見するに到った考え方や感動をもたらしたその人の感覚が如実に反映されていることになる。「写真」とは、そういった個人の頭の中が現実にぶつかった瞬間の記録ともいえる。しかし実際には、記念写真、珍しいものの記録写真、キレイな風景写真などの、あらかじめ「常識」として刷り込まれたイメージを撮影者がなぞっただけのものが大多数を占め、誰が見ても撮影された意味が判り、個人の幸せな（時々是不幸が交じった）記憶を記録したものが写真であるという「常識」が一般的である。「常識」自体は時代によってズレながら継承されていくものなので、当時の「常識」を忠実に反映している写真は、撮り手の個人的な記憶であると同時に時代を映しこんだ記録にもなっている。こうした無意識になされた記録を丁寧にみることで、時代の記憶を呼び覚ますことが非文字資料研究における写真の役割であると考えている。

一方、私が撮影している神社跡地の写真は、そのような「常識」に反した「写真」である。観る者が少し考えなければ、何が写っているのか判らない。当然、全て神社跡地の写真であるが、遺構が残っていない場所についてはなんの変哲も無い風景の「写真」である。そこには、その何も無いことにこそ読み取るべき事実がある、という意図がある。日常の風景に撮影を通して神社跡地という意味を与え、「写真」の力で観る者に対して、自らの「常識」を問い直そう、と呼び掛ける行為である。

撮影には大型カメラと4x5サイズのカラーフィルムを使っている。この組み合わせの意図は、通常の視覚では捉えきれない細部をも精密に記録することができる大判フィルムの描写力によって、その土地が持つ意味を忠実に捕まえることにある。技術的な点からいうと、神社を連想させる空間構成や、遺跡と周辺状況の関係性の視覚的な提示、異国感の挿入、などを心がけて撮影している。簡単に言えば、関東神宮の参道跡の写真（グラビア viii）のように、緑の並木道が日本の神社の参道のイメージと重なるように撮影することや、図録（注(3) 参照）に収録した京城神社や新竹神社のように画面の中に国旗が入るような構図を探す、といったことである。その場で起きた偶発的な事柄によって決定的な写真が生まれることもあるが、それには偶然をつかむ為の、無意識になされている、入念な準備が必要である。そのような瞬間はすぐにすり抜けていくので、捕まえることは難しい。図録に収録している台中神社跡の鳥居の上で遊ぶ子供達の写真はそうした1枚だと思っている。以上に挙げたような撮影者の意志を1枚の写真だけで感じとることは難しいが、複数枚の連なりとなった場合には撮影者の世界観が浮かび上がってくるだろう。

今回の撮影には白黒フィルムを選ばなかった。白黒写真に付きまとう過去への郷愁を排し、カラー写真が持つ猥雑な現実感が重要であると考えたからである。例えば、神社跡地に植物が生えている場所は多々あるが、場所ごとの多様な緑を捉え、それを日本の神社の緑と比較することは、カラー写真でなくてはなし得ない。神社に鳥居と境内林は必須であると言えるので、緑の重要性はお判り頂けるだろう。緑に加えて、空気の色や光の状態などの視覚的な要素が、清浄な空間として世に流布している神社のイメージ形成にどう作用しているのか、といった点も興味深い検討項である。

私は「写真」を、現実を「美」という基準で切り取って自分と世界の関係性を世間に提示する作業と考えている。私的な「美」の基準から外れた写真は写真作品には含まれないが、レンズの前にあった現実を記録したという点から見れば、どの写真も資料的価値を持っている。誰も調査していない神社跡地の写真ならば、どの写真も資料として活用できるだろう。実際に写真を資料として扱う場合には、画面が美しく整えられていればいほど、撮影時に撮影者の「美」意識による歪みが生じたことを考慮することが必要になってくる。写真の資料批判とは、画面の外にどういう世界が広がっていたのかを想像し、その上で何故このような写真を撮った

のか、を問い直す行為ともいえる。問い直す行為自体はどの写真に対しても行われるべきものだが、家族の記念写真よりは、特定の目的の為に撮影された「写真」には、より注意を払う必要がある。

一定の意志に基づいて撮影された一連の「写真」群は、広大な世界を読み解く鍵を与えてくれる場合すらある。これは通常の美術作品や文芸作品と何ら変わることがない。こうした試みに成功した場合（成功例はそう多くはないが）、「写真」は注意深く「読む」に値する作品となる。このような「写真」は「常識」の枠の中で撮られた写真と違い、意識的に時代を映したものとなる。

- (2) 稲宮康人「写真展示の概要について」ニューズレター『非文字資料研究』30号 P4-5
- (3) 『帝国後 海外神社跡地の景観変容』神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2012年
- (4) 黒河在満国民学校同窓会 HP の掲示板を使って問い合わせ、大体の位置を確定した。
<http://tan2015.web.fc2.com/kokka/index.html>
- (5) 海南島近現代史研究会の佐藤正人氏からメールにて教示を受けた。「海南海軍警備府は、海南島の首都海口に総司令部を置いていました。その場所は、海口中央部の高台で、いまは海口人民公園になっており、その入り口に、「革命烈士紀念碑」が建てられています。その碑の近くに、かつて「日本神社」が建てられていました。」「石原産業が田独鉦山につくった神社が地図に書き込まれています。外務省外交資料館〔海 I-2-4-4〕「田独鉦山平面図」1943年、石原産業採鉦課作成。2000分の1」
- (6) 防衛省防衛研究センター〔山下大将史料〕昭南 シンガポール 1/25 万には神社建設予定地に赤鉛筆で印が付けてある。占領後の雰囲気が伝わってくる史料。
- (7) NHK 戦争証言アーカイブス「サイゴン暁神社の鎮座祭〈共栄圏便り〉」『日本ニュース第128号』（1942年11月17日）<http://www.nhk.or.jp/shogenarchives/>
『民喜与吉著 東南アジア特集日記』
http://www.nmt.ne.jp/~tamiki/ikou_05.htm 12月7日、8日記事に「埠頭前広場暁神社前で整列をし」の記述がある。
毎日新聞社編『南方共栄圏天然色写真集』（昭和18年）サイゴン海軍埠頭に「ノートルダム大寺院の広場からカティナ通りをつきぬけるとサイゴン埠頭にて、この埠頭の西南側が海軍埠頭」とある。これらを総合すると大体の場所が推測できる。
- (8) 防衛省防衛研究センター〔南西マレージャワ 483〕スマトラ附近地図に神社の場所が書かれた手書きの地図がある。
- (9) オーストラリア戦争記念館 HP に当時の写真が掲載されている。
タラカン神社は取り壊され、オーストラリア軍の仮埋葬地になったようである。
<http://www.awm.gov.au/collection/108573/> <http://www.awm.gov.au/collection/108576/>
クーパンの神社 <http://www.awm.gov.au/collection/116585/> 両方とも現在地の特定には到っていない。
仮埋葬地の線から調べることが可能ではないだろうか？ オーストラリア国立図書館 <http://trove.nla.gov.au/> から当時の新聞記事、写真資料などの検索が可能。南洋神社の創建なども報道されている。
- (10) NHK 戦争証言アーカイブス「躍進鞍山製鋼所」『日本ニュース第119号』（1942年9月15日）
- (11) 八幡宮という説もある。写真4が社号碑か。
- (12) 大連世界旅行社 HP <http://www.t-railway.com/CCP209.html>
- (13) 津田良樹、中島三千男、堀内寛晃、尚峰「旧満洲国の『満鉄附属地神社』跡地調査からみた神社の様相」（神奈川大学 21世紀 COE プログラム研究推進会議『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号（2007年））
- (14) 防衛省防衛研究センター〔③中太平洋 27〕トラック島防備調査資料（第4艦隊司令部）に神社の大体の位置が記載された地図が載っている。
- (15) NHK 戦争証言アーカイブス「トラック諸島 消えた連合艦隊」『証言記録 兵士たちの戦争』（2011年3月26日）6分59秒付近の映像にトラック神社と書かれた地図が出てくる。
- (16) 海外神社（跡地）に関するデータベース <http://www.himoji.jp/himoji/database/db04/index.html>
- (17) 多くのものを曼荼羅状に配置・比較することで何かを見出す手法は、鶴見和子『南方熊楠』（講談社、1981年）P81-106を参照。